LITERARY COSMOS
愛媛県立医療技術大学図書館報　第１号　　2004.10.1

障害児を育てた大江健三郎氏の著書から

「受容する」

学部長　　岡部　喜代子

1994 年ノーベル文学賞を受賞した大江健三郎氏は、多くの長編小説とともに、エッセーや講演集を執筆し、21 世紀に生きる若い世代へのメッセージを発信しつづけていますが、愛媛の内子町の出身であることを学生の皆さんはご存知ですか？　国際的な文学活動をしている大江氏は、1935 年(昭和 10 年)に内子町で生まれて高校１年まで生活し、多くのエッセーの中で「僕は森の中の小さな村で育った。地球上の物質の中で一番好きなものは樹木だ」としばしば語っているように、著書においても木々に囲まれ、家族や地域社会とのかかわりの中で身につけた生活感覚や考え方をベースにしていることが強く感じとられます。

氏は、『鎖国してはならない』や『恢復する家族』の中で、自分の文学上の課題のひとつは、幸いにも日本の中の周縁に位置する地方の県のまた周縁の森の子として育ち、敗戦後の松山での高校生活、東京での大学生活、小説家としての生活と社会に開かれた経験をする中で、個として自立し、世界に開かれた心性を作り出すことを目指しつづけていると述べています。

また、もうひとつの課題は、脳に障害のある長男の光さんと家族ぐるみでの共生生活であると述べていますが、これを素材にした多くの作品があることはご存知でしょう。

私たち保健医療を担うものは、疾病や事故による障害や死に直面している人に支援をする必要にしばしば迫られます。しかし、支援を求められても、私たちが当事者として経験しない状況の真っ只中にある人が、まさに経験している危機状態や苦悩する心を同じ深さで理解できればと思いながらも、ほとんど不可能に近いと実感させられます。ではありますが、少しでも近づいていくことができる力を培う一つの方法として、自らの体験をもとにリアリティーと豊かな表現力で伝えてくれる上質の文学から学ぶことが可能であると考えます。

大江氏は、『同じ年にうまれて』の中で、小澤征爾氏との対談で、「僕の小説を書く上での原理的態度は、自分の中にあるものを搾り出すこと、そしてそれをどうやって他の人たちに届けるかを努力することである」と述べています。一方、『ゆるやかな絆』のあとがきで、「澄み渡って強い、明快な音楽が奏でられるような文章にあこがれながらも、語りたい論理を正確に表現しようと書き直しを繰り返すため、複雑で難解な悪筆の代表格といわれる文章になる」とも語っています。私も、大江氏の初期の著書である『死者の奢り』や、1958 年の芥川賞を得た『飼育』

を一応手にはしたものの、なにかを伝えようとする強烈なメッセージ性を感じとりながらも、くどく難解な表現に閉口し敬遠しつづけていました。

しかし、1965 年に出版されたエッセー『ヒロシマ・ノート』に何気なく目をとおしてからは、大江氏の感じ方や考え方を平明に語るエッセーや講演集が、自分のこころの何かが枯渇したと感じた時にめくる著書のひとつになりました。

ここに、大江氏が、長男の出生後、苦悩しつつ日々克服し、音楽に導かれて社会とつながって成長する光さんの姿と家族の恢復の過程とを表現した作品の一端を紹介し、学生の皆さんに読書を薦めたいと考えます。

『ヒロシマ・ノート』によると、光さんの誕生は、1963 年(昭和 38 年)6 月ですが、氏は、その 8 月に、原爆投下の日にあわせて雑誌「世界」の取材のため、広島への旅を余儀なくされています。この時の記述には、「自分の最初の息子が瀕死の状態でガラス箱のなかに横たわったまま恢復の見込みはまったくたたない始末であった」とあり、「広島らしい人々との出会いで、ガラス箱の中の自分の息子との関係で落ち込みつつある一種の神経症の種子、頽廃の根をえぐられる痛みの感覚とともに勇気付けられた」ともあります。また、広島ですごす最後の夜に、「核戦争への恐怖のあげくパリで自殺した友人のための燈篭流しにでかけた」とあります。一方、真に広島的な人として、自ら被爆しながら、直後から未知の原爆症の治療を手探りしつつ決して屈服しなかった広島赤十字病院の重藤院長をはじめ多くの人々との出会いによって、人間の悲惨を正面から引き受けて、忍耐し、努力し続ける生き方と考え方をとらえて「屈服しない、正当な人間に出会った」と感動をこめて語っています。

それから 31 年を経た 1994 年、国際医療フォーラムにおける講演「癒される者」のなかで、このときの心の動きが一層生き生きと語られています。

「広島に滞在し、脳に異常がある息子の手術をしていただくか否かを判断することに迫られていた上に、原爆禁止の政治的混乱に疲れきっており、その時、まだ子供は病院のガラス箱の中で生きていたにもかかわらず、燈篭流しの燈篭に息子の名前を書いた。その上、やっと思い出したのだが、自分の名前ももう一つの灯篭に書いていた。息子と自分とが、生命の側にいるというよりは、死んだ人間の側にいる。すなわち、心的感覚麻痺(サイキック・ナミング゛)に陥っていた」と説明しています。しかし、「その時、出会った重藤院長が私に向かって、゛被爆直後にひとりの君のように若い眼科の医師がいた。彼がこのように多くの負傷者がいるにもかかわらず、原爆症の治療の原理も方法も何一つわかっていない。このような中での我々の努力は無意味ではないかと訴えた。自分はこの議論は昼休みに続けようと言って別れた。ところが、昼休みになる前に自殺してしまった。自分としては、彼に対して、目の前に苦しんでいる人がいる。その時、自分たちにはかれらを治療するほかないではないかと言いたかったんだと思う゛と話された。つまり、自分の子供は障害をもって生まれてきたことについてどうすることもできない。君の子供はそこで苦しんでいる。この場合、彼のために闘うほかないじゃないかと言おうとされたのだとしっかり受け止めた。そして手術をしていただくことを決心した」と述べています。

長男が生まれた瞬間から、手術によって命が救われたとしても生涯重度の障害者として生きていくことになることを覚悟し、手術を受けさせようと決断するまでの父親としての苦悩と子供の死を願う心の危機について、執筆したのは長編小説『個人的な体験』です。そのあとがきには、若い夫婦が、狭い二階の貸間に退院させた手術後の光さんをつれて毎日病院通いをしながら、絶望したり苦渋をあじわいつつ執筆し、勇気を奮い起こした様子が記されています。

それ以外にも、頭部に異常のある子供とし

て生まれてきた息子に触発されて生まれた作品が数多くあります。たとえば、当の子供を闇にほおむったために、父親としての生存の意味をも見失ってしまった男を描いた『空の怪物アグイー』、手術した後人間の子供らしい反応を示さなくなった子供を手元において世話することをしなくなった両親の頽廃を描いた『万延元年のフットボール』など、鋭く心に迫ってきます。

1995 年になり、この光さんが成長しつつ家族ぐるみで生活する様子は、大江氏の優しく透明な文章と光さんの母親であるゆかり氏のすてきな画による長編エッセー『恢復する家族』と、続いて執筆された『ゆるやかな絆』のなかに鮮やかに描かれています。

また、『恢復する家族』の中には、1988 年に東京で開催されたリハビリテーション世界会議において講演した「受容する」について、12 ページを割いています。

氏は、「講演を依頼された上田敏教授から著書『リハビリテーションを考える－障害者の全人間的復権』を贈られて、この本を読み、まさに新しい世界に導かれる経験をした。特に、上田先生が明確に 5 段階の分節をきざんで体系化している、障害者となってからの心の移り行き分析にひきつけられた。障害をこおむった人間が、心理的にも苦しい過程ののち、どのようにして自分のありかたを積極的に引き受けて、障害ともども家庭と社会の中での役割を果たしうるようになるのか？　障害の受容という、その完成の地点に至るまでのリハビリテーションに、文学の、さらに言えば文化論の考え方と共通し、かつそれをリアリスティックに先導するものであることを見出す気がした。」と表現しています。

そして、最後に、「僕は、障害児の親としての経験と、小説家としての経験にたって、「ショック期」、「否認期」、「混乱期」の、障害者とその家族が苦しみをともにして生きる過程の重要さということをあらためて自覚した。これらの大きな苦しみの過程がなければ、確実な「受容期」もない、それがすなわち人間であることだと思う。僕がいまもっとも誇らしく思うことは、障害を持つ自分の息子に、人間らしく寛容でユーモラスでもある信頼にたる人格を認めることであり、また、共生する家族みながその影響を受けていることである。」と結んでいます。

注:　5 段階とは、ひとりの人が事故などによって障害をうけることによって、「ショック期」の無関心や離人症的な状態。「否認期」の心理的な防衛反応として起こってくる、疾病・障害の否認。つづいて障害が完治することの不可能性を否定できなくなっての「混乱期」における、怒り・うらみ、また悲嘆と抑鬱。しかし、自己の責任を自覚し、依存から脱却して、価値の転換をめざす。この「解決への努力期」をへて、障害を自己の個性の一部としてうけいれ、社会・家庭のなかに役割をえて活動する「受容期」をしめします。

なお、看護学科の学生の皆さんは、専門科目のなかで「受容過程」について詳しく学びます。

（おかべ　きよこ）

引用・参考にした著書

〈大江健三郎〉

ヒロシマ・ノート　岩波書店
あいまいな日本の私　岩波書店
恢復する家族　講談社
空の怪物アグイー　新潮社
万延元年のフットボール　講談社
鎖国してはならない　講談社
同じ年に生まれて　中央公論新社
ゆるやかな絆　講談社

〈上田敏〉

リハビリテーションを考える
　－障害者の全人間的復権　青木書店
リハビリテーションの思想
―人間復権の医療を求めて－　医学書院

大学図書館の動向

―公立大学図書館を取り巻く環境―

図書館長　　門田　成治

今春、大学改革として国立大学の独立行政法人化がスタートし、この波は公立大学にも押し寄せている。かような時世の中、この４月に本学（愛媛県立医療技術大学）が開学し、現短期大学は２年後に閉学となる。これに伴い、本学図書館は公立短期大学図書館協議会を脱会し、４月松山市で開催された第 52 回中国四国地区大学図書館協議会総会および第 10 回公立大学協会図書館協議会中国四国地区協議会総会で、これらの協議会への加盟の承認を得、大学図書館の仲間入りをした。6 月には富山市で第 36 回公立大学協会図書館協議会総会が開催され、本学図書館が当協議会の加盟館として紹介された。さらに７月には松山大学にて愛媛地区大学図書館協議会が開催された。これらの総会では大学図書館の活動や将来への取組が活発に議論された。総じて公立大学図書館は国立および私立の大学図書館の動向に影響され、かつ社会的な環境の変化に対応していかねばならない宿命にあろう。本館報では大学図書館の動きと公立大学図書館を取り巻く環境について概説してみよう。

6 月の総会で文部科学省から「変わる大学図書館」と題した資料が提供された。それは国公私立大学（計 699 大学）を対象とした平成 15 年度大学図書館実態調査結果報告を取りまとめたものである。内容は次の３点に集約されている。以下、資料を引用して紹介する。

（1）電子的情報の提供状況：ホームページから、蔵書目録などの各種データベースやデジタル化した貴重書の画像などの情報発信が着実に進展している。また電子ジャーナルの購読が急加速（5 年間で 77.5 倍）しており、とりわけ国立大学での購読が充実している。

（2）時間外開館の実施状況：平日、休日の時間外開館の実施率は増加傾向にある。8 割の図書館が時間外開館を実施しており、開館時間も着実に延長している。国立大学の約４割が図書館・室の 24 時間開館を実施している。

（3）図書館の公開状況：一般市民等への公開はほぼ定着（92.2%が実施）している。夜間等の時間外開館時間でも公開は進む方向にあり、学外利用者数も増加傾向（10 年間で 4.2 倍）にある。

また文部科学省は大学図書館の時代の変化に対応した特色ある取組を強く進めている。同資料には、地域社会との連携、特色あるコレクションの電子化、使いやすく快適な図書館づくり等、国立大学図書館の実例として以下の５点が示されている。なお、その資料中の記載大学名を省略し引用する。

（1）地域貢献の一層の促進に向けて　―地域に根ざした取組―（3 館）：公共図書館等で有している郷土資料の電子化を支援。県内図書館等からの情報発信を支援。公共図書館等のコンソーシアム（共同連合体）を形成し、館種を超えた貸出・返却が最寄

りの図書館から可能。つまり、どこからでも貸出・返却できる地域コンソーシアムを形成している。大学図書館内に子ども図書室を設け、地域の子ども達に開放。

（２）安全で安心できる社会の実現に向けて　―現代社会の課題へ対応した取組―

（２館）　巨大地震に備えた防災シンポジウム、東南海・南海地震シンポジウムを開催。地震、防災関連資料を展示。阪神・淡路大地震に関する資料を収集し、データベース化。

（３）資料の電子化とその活用に向けて―付加価値のある情報発信の取組―（２館）

郷土資料を電子化して情報発信。その情報は生涯学習・学校教育でも活用を期待。つまり郷土資料のマルチメディア化を地方自治体と実施している。

（４）教育研究環境の国際化に向けて　―蔵書目録の多言語対応―（１ 館）　オリジナルスクリプト（原綴り）による多言語対応。アジア・アフリカ諸言語史の拠点を形成。

（５）図書館利用環境の改善に向けて　―先進的な施設･設備を導入―(２館)　大学図書館に多機能文化空間を創出。つまりカフェやリフレッシュルームを設け、学生のくつろぎの場を演出。IT を活用し図書館業務を合理化。さらに国立大学図書館の中には自動（無人）入退館管理システム等により無人開館を行っており、36 の国立大学（37.1%）では 24 時間開館を実施している。

最後に公立大学図書館協議会で大きな課題として取り上げられているものを一つ紹介する。平成 16 年４月から国立情報学研究所は NACSIS-ILL システムを利用した図書館間での文献複写、現物貸借に関する料金の相殺サービスを開始している。このサービスは事務処理の合理化を目指して登場した。その利用は国私立大学図書館では普及しているが、地方自治体の財源で運営されている公立大学図書館ではそれ特有の問題があり、全国 78 館のうち約半数の 37 館の利用にとどまっている。なお中国・四国地区では、９月 13 日現在 12 館のうち４館のみ利用している。より一層の当システムの利用普及が望まれる。

以上、公立大学図書館を取り巻く環境を文部科学省や国立大学図書館の動きを中心に概説した。本学は公立大学として開学してまだ半年しか経っていない。しかし冒頭に述べたように、国立大学で始まった大学改革は公立大学にも怒涛のごとく押し寄せている。つまり大学は淘汰される時代に突入したのである。今後、大学が生き残っていく大きな要因の一つは、教育・研究の中核機関である大学図書館にあると言っても過言ではないであろう。本学教職員および学生が一体となって、時代の変化に対応した特色ある大学図書館を創り出して行かねばならない。

（かどた　せいじ）

引用文献

（１）「変わる大学図書館」：第 36 回公立大学協会図書館協議会総会で文部科学省研究振興局情報課から提供された資料

（２）第 14 回公立大学協会図書館協議会事務長会の資料

読書の醍醐味

―別世界に遊ぶ―

看護学科　　関谷　由香里

自分の人生において、一体どのくらいの書物と出会うのだろうと、ふと考えることがある。幼い頃には絵本や童話に出会い、絵や文字で表現された世界を想像して、自分だけの世界に遊んだものだった。少女時代には、教科書とは別に、偉人伝や文学作品と出会い、自分の夢を持つことの大切さや、人として、して善いこととしてはいけないことを、登場人物の在りようを通して学んだ。そして、恋愛について、人生について、数多くの書物から様々な事柄を学んだ。その後、青年期から現在に至るまで、幸いにも書物との縁は切れず、その時々手にした書物が、自分の来し方を指し示しているような気がしている。

現代は、IT の進歩により、書物も電子化され、PC があれば、いつでもどこででも自分の読みたい書物を読むことができる時代である。科学技術の発展による恩恵を多分に享受している昨今、これもまた、変化する時代の所産として甘受せざるをえない。更に、TV、VTR、CD、そして DVD と、直接視覚に訴える再生可能な AV 機器は、読書にかかる時間をはるかに短縮して、我々に魅力あるバーチャルリアリティーの世界を齎してくれている。

しかし、これらは、嘗て我々が読書を通じて、そこに描き出されている世界を想像したり、作者のメッセージをあれこれと考えたりする、現実の世界とは異なる別世界に遊ぶ楽しい時間を与えてはくれない。ましてや、学術的な専門書の持つ奥深い知識の世界は、いかにインターネットでたやすく多種の情報が入手できるようになった今日においても、PC や AV 機器を眺めていては窺い知ることもできない。

三国(魏)時代の董遇の言に「讀書百徧而義自見」(讀書百徧にして義自ら見はる)とあり、一冊の書物に書かれている事柄(知識や意味内容)は、その書物を百遍(徧)も読めば自然と分かるようになるという意味である。同じ書物一冊を百遍(徧)も読んだ体験は皆無に等しいが、学術専門書や文学作品は部分的に何度か読み返したり、１０年、２０年を経て再び読んだ体験はある。そうした時、以前曖昧だったことが明確になったことも、以前とは異なった世界が見えたこともあって、これが読書の醍醐味なのかと、この董遇の言に一人感心したものであった。

（せきや　ゆかり）

参考文献：『三国志』巻十三　魏書十三　鐘繇華歆五朗傳第十三　裴松之注

〈注〉

『三国志』巻十三　魏書十三　鐘繇華歆五朗傳第十三に「自魏初徴士燉煌周生烈、明帝時大司農弘農董遇等、亦歴 - 注經傳、頗傳於世」とある。また、同裴松之注に「…前文略…。初遇善治老子、為老子作訓注。又善左氏傳、更為作朱墨別異。人有從學者、遇不肯教, 而云「必當先讀百徧。言「讀書百徧而義自見」」とある。

読書について

看護学科　　奥田　美恵

最近は図書館を利用するのは、休日でさえもっぱら専門書をみる時になってしまっている私だが、学生の頃から趣味の欄には「読書と映画鑑賞」と記入することが多かった。

小・中学生の頃は、ＳＦや推理小説等を好んで読んでいた。少年探偵団シリーズや、ハヤカワのＳＦ小説等、学校の図書室で物色しては、幾人もの先輩たちが借りて、厚い表紙もすり切れて中の紙も茶色く変色した本たちを、とっかえひっかえ読み、その世界にどっぷりと浸かっていたような気がする。ノンフィクションを読むようになったのは高校生の頃からだったろうか。新聞記者が書いた、いろいろな国の文化を描写した本を読んでいたのを少し覚えている。大きく分ければ、文化人類学の中に分類されそうな本だったが、その国の文化に興味があったというよりは、その本に登場してくる人々や、その本にあらわされる作者の人柄に触れるのが楽しくて読んでいたような気がする。

考えてみれば、以前の、「本を読む」とは私にとってそういうことだった。その主人公や、登場人物に肩入れし、その人のものの見方、価値観に共感したり、自分を置き換えてみたり、そんなふうになりたいと思ったり…。その後就職して後くらいかからだろうか、エッセイや、ノンフィクションの中に自分の迷いや困りごと、人生を教えてくれることのヒントがないだろうかと思（ってかどうかは自分でもよくわからないが）い、読むようになったのは…。読書をすることによって、自分の経験だけでは考えなかったような事柄を考えさせられる事があり、そんなとき、少し自分の世界が広がったような気分になり、ほんの少し、世界が違って見える気がするのだ。そんな本を読んで生きるヒントをもらいながら、また、社会に出ての幾ばくかの経験をしながら、ゆっくりとではあるが、これまで進んできた気がする。

日常の出来事に悩んだり、日常がつまらないと思う時、周りのいろいろな人に相談することはもちろんだが、ちょっと視点を変えてくれる、そんな本に学生の皆さんが出会える事を願っている。

（おくだ　みえ）

MEMORANDUM

図書のリクエストについて

本学在学生で図書館に入れて欲しい本がある人は、カウンターの「購入希望図書票」に必要事項を記入して提出してください。購入するかどうかは、図書委員会で協議して決定します。

個室ブース・グループ研究室の利用について

図書館南側にある個室ブース２部屋とグループ研究室が、下記のとおり利用できます。利用希望者は図書館カウンターで申し込んでください。

１　利用できるのは
　本学在学生　教職員
　ただし、グループ研究室は学生のみの利用はできません。
２　利用時間
　図書館開館時間内ならいつでも利用できます。
　ただし、個室ブースは１人１回２時間まで。予約がなければ延長もできます。
３　利用定員
　個室ブース　　１人×２部屋
　グループ研究室　８人まで　１部屋
４　利用にあたって
　申込みが必要。
　図書館の係員の指示に従ってください。

館内利用マナーを守りましょう！！

図書館では、他人の迷惑になる次の行為は厳に慎んでください。場合によっては、退室していただくこともあります。

１　私語
２　携帯電話
３　飲食

平成１６年１０月１日
愛媛県立医療技術大学図書館
伊予郡砥部町高尾田543番地（〒791-2101）
TEL・FAX(089)960-0061　図書館直通
http://www.epu.ac.jp/lib/